

第三回 大會議 討論 報告
 一、 議 題
 ○ 農村 發展

山内 國語會 編輯 出版

宜 言 草 案

世界の資本主義は既に崩壊の過程に入り、列国は争ひて深刻なる産業不況の中に苦悶して居る時、日本も資本主義は積り不安定の傾向を示すか、如く見申さば、我々今日の景気は所謂一九三五六年の「恐慌」局と目標とする軍需インフレと田圃の暴落に依る輸入インフレにその主体を置くものにして、限りなき「反」犠牲の上に打つ建たれた「跛行」の一時的人造景気に過ぎず、断じて全般的「好況」非ざるは明白である。明年の海軍及縮會議の政治的外交手段を通じて、「恐慌」非常時の解消と共に軍需インフレは必然に行き詰り、農村の飢死の強々之被産業の破壊は益々深刻に拡大され、「丹産業」は全く萎微衰頹として、深刻なる不況の大穴は吹き荒れ、その被害は敢て「労働階級」に殺しかせらる。

この危局を直視して日本労働組合全議は昨冬「産業と労働」統制に用いる重大なる建議を政府要請し、抜口の産業と労働の飯趨を明示する。其に從來の主張たる「産業協力の実を成るるに抜口の九州地方協議會」亦この大方針に沿つて全口的運動の一翼を積極的に参加した。然るにインフレの巨利は従つて資本家階級に独占され、労働階級はインフレの余惠は嘗てあらず、労働賃金は日甚く最近漸騰と云ふ旅々である。此は一面に労働階級が家庭生活と其の健康を益々犠牲に供した弊業、夜業等の弊制の若くは強化の筋果として、インフレに依る物價の暴騰と相殺すれば却つて労働階級の実質収入は激減されてゐる。而して資本家階級は所謂「非常時」の名を藉りて之を逆用し、更に労働階級のみの犠牲を強制する攻撃的態度を示してゐる。言ひましても、単の産業協力の産業協力は労働者の公正なる分配と協働の精神の上でのみ実現されるものである。然るに今日資本家階級の態度を自覚し、彼等各自の「産業と労働協力の精神と疎離」して居る。是は遺憾である。わが水常務委員は敢て「労働者の権利」を労働階級に正當なる團結組織の自由なきと起因する労働階級の健全なる組織と協力の依つた非「断」して、眞の「国家産業の健全なる發展」平和は招来し得べきことを断言し、我等は敢て、「国家産業の立場から労働階級の團結権確認を要求する。」

九州地方協議會は日本労働組合全議第三回年會大會に建議を如く「提案」として抜口の産業と労働を統制する建議を実現させ、地方的部署者に就き、先づ福岡縣下の産業と労働を統制する機用の設置に邁進し、加盟団体と協働してその合理的行政、経営を以て労働組合の平和的建設的責務の主力を注ぎ